

テレビドラマから見る男性同性愛者の描かれ方

-社会学・メディア研究から見る同性愛-

法学部政治学科 4年 H組 31158723 巴健太郎

<b>第一章</b>	<b>問題意識</b>	<b>2</b>
<b>第二章</b>	<b>研究概要</b>	<b>3</b>
<b>第一節</b>	今回の研究の対象について	3
<b>第二節</b>	研究の手法について	4
<b>第三章</b>	<b>先行研究レビュー</b>	<b>4</b>
<b>第一節</b>	社会学的分析	5
<b>第一項</b>	前川直哉のセクシズムと「男の絆」研究	5
<b>第二項</b>	風間孝・飯田貴子の男同士の結びつきとホモフォビア分析	6
<b>第三項</b>	堀あきこ・佐藤雅樹・溝口彰子によるヤオイとゲイ差別問題	7
<b>第二節</b>	メディア論的分析	8
<b>第一項</b>	フィスクによるテレビドラマ分析	9
<b>第二項</b>	藤田によるテレビドラマ分析	9
<b>第四章</b>	<b>男性同性愛者のテレビドラマ分析</b>	<b>10</b>
<b>第一節</b>	テレビドラマにおける男性同性愛者とホモフォビア	10
<b>第一項</b>	当事者以外によるホモフォビア	11
<b>第二項</b>	当事者自身によるホモフォビア	12
<b>第二節</b>	テキスト分析	14
<b>第一項</b>	「叶わない恋」という終着点	15
<b>第二項</b>	「男性性」の喪失	15
<b>第三項</b>	極端な女性らしさと男性らしさの強調等	19
<b>第三節</b>	同一対象に対する表現の揺らぎ	26
<b>第一項</b>	「BOSS」の事例	26
<b>おわりに</b>		30
<b>参考文献</b>		31

## 第一章 問題意識

近年、世界各国でセクシュアルマイノリティーの可視化や法律の整備が進み、取り巻く環境は良くなってきていると言われている。最近の例としては、英国の一部やルクセンブルクでの同性結婚を認める法律が成立・施行された事や、アメリカ最高裁において同性結婚について容認するような判決が下されたりするなど、世界レベルで見たとき、少しずつではあるが同性愛者に対するまなざしや社会制度は変わりつつある。日本においても 2011 年の統一地方選ではゲイとカミングアウトしたうえで当選した議員が 2 人誕生し<sup>1</sup>、女性同性愛者のカップルが自らの経験や今後の希望について話す様子がゴールデンタイムのテレビ番組で流れ<sup>2</sup>、ダイヤモンド社のビジネス情報サイトでは LGBT をテーマとした連載記事が書かれるようになる<sup>3</sup>など、同性愛者に対するまなざしは変わってきているように見える。

だが、同性愛者に対する差別は同性愛者団体に対する嫌がらせに端を発する府中青年の家訴訟<sup>4</sup>の存在や、ゲイ・バイセクシャル男性に対するインターネット調査である「REACH ONLINE」においても、2008 年度の結果<sup>5</sup>では「ホモ・おかま・おとこおんな」といった性的指向に関連する言葉による暴力被害経験割合は 54.0%に上っており、2011 年度の結果<sup>6</sup>でもメンタルヘルスに関する調査においてメンタルヘルスに不調がみられる人の割合が標準の 26.5%に比べ、46.6%と非常に大きくなっていることから、同性愛者に対する差別はいまだに存在していることがわかる。

これらの精神の不調や心ない言葉による被害は主に当事者ではない異性愛者によってもたらされるものであるが、ここで問題となるのがそもそも現代において異性愛者の側は「同性愛者」にたいしてどのようなイメージを持っているのか、またそれは同性愛者にとって適切なものであるのかという点である。

もし、同性愛者に対するイメージが特定のタイプに偏っており、そのイメージ自体に問

---

<sup>1</sup> 大橋希、「日本初の「ゲイ議員」が誕生」、ニューズウィーク日本版  
<http://www.newsweekjapan.jp/newsroom/2011/04/post-218.php> 閲覧日 2013 年 10 月 5 日

<sup>2</sup> 東小雪、「第 65 回 初の民放バラエティに挑戦！「私の何がイケないの？」 | 2CHOPO 読みもの」、2CHOPO <http://www.2chopo.com/article/808/> 閲覧日 2014 年 7 月 22 日

<sup>3</sup> 池富仁・片田江康男、「LGBT——もはや、知らないでは済まされない——」、ダイヤモンド・オンライン <http://diamond.jp/articles/-/21153> 閲覧日 2014 年 7 月 22 日

<sup>4</sup> 府中青年の家訴訟については、風間孝・河口和也「同性愛と異性愛」の第二章において詳細な記録が残っており、本訴訟は男性同性愛者に対する差別について大きく取り上げられた初めての訴訟となっている。

<sup>5</sup> 日高庸晴、「REACH ONLINE 2008」<http://gay-report.jp/2008/index.html>  
閲覧日 2013 年 1 月 31 日

<sup>6</sup> 日高庸晴・嶋根卓也、「REACH ONLINE 2011」<http://gay-report.jp/2011/index.html>  
閲覧日 2013 年 1 月 31 日

題があるのであれば、それは当事者たる同性愛者に対して望ましくないものとなり、同性愛者にとっての生き辛さの原因となる。

そういった問題意識をふまえ、本論文では同性愛者が日本社会においてどのようなイメージをもたれているのかについてテレビドラマを対象に分析を行い、現代の同性愛者のステレオタイプを探っていきたい。

## 第二章 研究概要

### 第一節 今回の研究の対象について

本論文では男性同性愛者の役が出てくるテレビドラマ、具体的には役者自身の語りや周りとの関わりの中で男性同性愛者であることがわかるものを対象とする。放送された時期や時間帯については、2000年代以降の日本の主要キー局でプライムタイムと呼ばれる時間帯に放送されたもののうち、シリーズ・ドラマと連続ドラマ<sup>7</sup>を対象とした。また、アクセスの問題から、DVD化されているものに絞って分析を行なった。プライムタイムとは視聴率を時間帯別に見るときに使われる、1日の時間区分のうちの19時～23時の4時間の通称<sup>8</sup>で最も視聴率が高くなる時間帯であり、社会におけるステレオタイプ構築への影響の強さから、この時間帯に放送されていた以下のドラマを分析する事とした。

また、対象を男性同性愛者にしぼったのは他の性的少数者に比べて男性同性愛者が最もドラマの役として出ており、より緻密な分析が出来る為である。確かに性的少数者のうち、男性同性愛者であるゲイにばかり注目が行く事は、日本のジェンダー格差にも関わる問題ではあるものの、最も可視化が進んでいる男性同性愛者について調査する事で、他の性的少数者の可視化の助けになる可能性を鑑みて、男性同性愛者のみにしぼって調査を行った。以上の条件で対象となるドラマと役を探したところ、以下の12本、17人が対象として挙げられた。

[表1：本論文の研究対象(ドラマのタイトルは年代順)]

1 誰よりもママを愛す	ピンコ(山田 一郎)
2 のだめカンタービレ	奥山 真澄
3 花ざかりの君たちへ(2007)	中央 千里

<sup>7</sup>藤田真文、「ギフト、再配達-テレビ・テキスト分析入門-」、東京：せりか書房、2006年、39頁より

<sup>8</sup>「プライムタイム | ビデオリサーチ」、ビデオリサーチ社

<http://www.videor.co.jp/about-vr/terms/prime-time.htm>、閲覧日 2014年11月11日

4 同上	梅田 北斗
5 同上	中津 秀一
6 佐々木夫妻の仁義なき戦い	猪木 鉄男
7 同上	小川 考司
8 BOSS(シーズン1)	岩井 善治
9 タンブリング	水沢 拓
10 BOSS(シーズン 2)	岩井 善治
11 花ざかりの君たちへ(2011)	中央 千里
12 同上	梅田 北斗
13 同上	中津 秀一
14 素直になれなくて	リンダ(市原 薫)
15 クレオパトラな女たち	黒崎 裕
16 シェアハウスの恋人	櫻井 雪哉
17 失恋ショコラティエ	六道 誠之助

## 第二節 研究の手法について

今回の研究においては大きく分けて二つの学問領域にまたがって研究を行う。まず社会的な先行研究との比較を行い、現代の男性同性愛者に対して異性愛者がどのような眼差しが向けているのかを明らかにする。また男性同性愛者について書かれた本についての研究を行ったやおい論とも比較を行い、男性同性愛者について当事者ではない人物がそれをモデルとして記述することについて、その中で描かれる当事者・非当事者の両方の語りの中から社会全体での偏見や差別を導き出すことができることを用い、テレビドラマの中での男性同性愛者に対するホモフォビアの分析を行う。

その後、分析対象となるテレビドラマにおいて男性同性愛者がどのように描かれる傾向を持つのかについて、メディア論のテキスト分析などの考えを用いて分析を行う。具体的にはドラマ本編のなかでの描かれ方や扱われ方について、分析対象のうちの幾つかのドラマで共通して見られる特徴の分析を行う事で、現代における男性同性愛者の認識を探っていく。

## 第三章 先行研究レビュー

本章では、実際に先行研究ではどのような研究があり、それが今回の研究とどのような関わりを持つのかについて、第2章第2節であげた分析の軸をもとにレビューを行っていく。

## 第一節 社会学的分析

本論文においては男性コミュニティの中での同性愛の取り扱いについてもその分析の対象としているため、男性異性愛者が同性愛についてどのように思っているのかをフォーカスグループ・インタビューをもとに分析した風間孝・飯田貴子の研究<sup>9</sup>を参考にす。また男性同性愛を元とした作品であるヤオイの中で、同性愛者が自らの性的指向を悲観したり、否定したりする行為からホモフォビアを明らかにしていこうとした堀あきこ<sup>10</sup>と佐藤雅樹<sup>11</sup>、溝口彰子の研究<sup>12</sup>を参照していく。

### 第一項 前川直哉のセクシズムと「男の絆」研究

前川はヘテロセクシズムという価値観のもとで男性が「男の絆」を深めようとするそこに性的な感情が無い事を示す為に「下ネタ」を用いて自分が女性に欲情する存在である事をアピールする事について指摘している。この傾向は戦前の男子学生にも見られ、性に関する知識や経験に乏しい男性が「男の絆」コミュニティに入れてもらえないという現象を提示している。そして「男の絆」のホモフォビアとして、ヘテロセクシズムが支配的なこの社会で異性愛の下ネタをさける事で男性同性愛者ではないかと疑われる事を指摘している。具体的には、現在のように「男性同性愛者」というカテゴリーが揺るぎなく出来上がっていると、その一員であると認識されると「男の絆」コミュニティには決して戻れなくなってしまう。理由として「男の絆」はあくまで「恋」や「セックス」とは無縁な「友情」によって結ばれなければいけないとされ散るからで、「男性同性愛者」はその決まりに反する以上、一定の距離を置かれる事になってしまうことになるとしている。ほかにも前川は男性が自らを性的な対象としてみられないと言う思い込みを男性同性愛者は覆し、自分たち男性が性における能動側であり、性を支配される側ではなく支配する側にいるはずだという幻想を揺るがしてしまうものであるとしている。

---

<sup>9</sup> 風間孝・飯田貴子「男同士の結びつきと同性愛タブー」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、93-124頁

<sup>10</sup> 堀あきこ、「ヤオイはゲイ差別か?」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、21-54頁。

<sup>11</sup> CHOISIR 編「やおい論争合本」、自費出版、1994年。この本は自費出版であり、元々はCHOISIR というフェミニズムに関心がある女性のためのミニコミにおいて行われた論争をまとめたものであり、現在はどちらも入手が大変困難になっている。そのため堀の引用からはページまで追うことは不可能だったことを記しておく

<sup>12</sup> 溝口彰子、「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアー最近のやおいテキストを分析する」、『クィア・ジャパン Vol.2』、東京：勁草書房、2000年、193-211頁。

る。また前川は「男性同性愛者はすべての男性に欲情するものだ」という誤解がまかり通っているのも同じような理由であり、性的な欲望にさらしている事に慣れていない男性は目の前の男性が同性愛者だと知ると、まるで自分が狙われているかのように錯覚する事があることも指摘している。

## 第二項 風間孝・飯田貴子の男同士の結びつきとホモフォビア分析

風間孝と飯田貴子は20代のスポーツをしている大学関係者へ同性愛についてどのように思っているのかを調べたフォーカスグループ・インタビューをもとに、男性間での結びつきとその中に見えるホモフォビアについて分析を行っている<sup>13</sup>。

風間らはゲイへの嫌悪感を分析する上でスポーツをしている男性を選んだ理由としてプロスポーツの世界においてゲイ男性は過酷な状況におかれている事と男女に分かれて活動する事が多いが故に、同性愛者と同性のグループからの印象を知る事が重要であることと、近代スポーツにおいて未だに女性を「二流」とし、またホモフォビアを強固に残存している力学が強く働いているからであるとしている。

まずスポーツにおいては男性性が規範化されており、「男性っぽい」女性選手のようにその価値観に近づくものは評価され、そこから遠ざかる「女性っぽい」男性選手にはサンクションが与えられている事を指摘し、それが企業社会でも同様の構造が見て取れるであろう事を示唆している。

続いてゲイをさける理由としてまず挙がっていたのは自分自身が好かれてしまう事の恐れであるが、それだけであれば女性と比べて男性がゲイを恐れる理由に説明がつかない。こういった拒絶感の動機については明確な自覚は無いものの、分析の結果として男であるにもかかわらず性的欲望の客体となるような性行為ではないかと風間らは推測を行っている。これらの事から男性にすかれる事への恐怖と男性同士のセックスへの強い拒絶感は関連していると考えられている。また、男同士の関係について結婚や子どもにつながらないという考えと、周囲からの視線によって自分がそうでなくとも男性が好きな人間として見なされてしまう事への恐れという同性愛者が不可視であるが故に自らもそう見られてしまう事が同性愛者への嫌悪の理由である事を明らかにしている。

その後は男性間の結びつきについての話し合いが行われたが、そこではインタビューの側から三種類の返答があった。裸の付き合い・酒を飲みに行く事・家で何もせず一緒に過ごす、というものであり、風間らはこれらの特徴としてある意味無防備であり、

---

<sup>13</sup>風間孝・飯田貴子、「男同士の結びつきと同性愛タブー」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、93-124頁。

かつ性的にもなりうる場面を共有しつつ、そうならない事が男同士の結びつきを示し、高めているのと同時に結びつきが微妙なバランスのうえに成り立っている事を挙げている。また結束力を高めるために戦国時代の同性愛という例を挙げつつも、現代社会ではイメージできないという発言を例に挙げつつ、同性愛は結束力を高める手段の一つではあるものの、現在はそれを用いてはならないという意識が働いているところから風間からは「焼肉以上」の結束力を高める手段として「性的接触」があるのではないだろうか、と分析している。

### 第三項 堀あきこ・佐藤雅樹・溝口彰子によるヤオイとゲイ差別問題

堀あきこはヤオイとゲイ差別の問題について漫画を中心とした分析を行っている<sup>14</sup>。彼女は佐藤裕の文献から差別を「もともと異なっている社会的カテゴリーの間の関係ではなく、〈よそ者〉という関係を作り出す」<sup>15</sup>と定義しており、これを引用した理由として堀は以下のように述べている。

「差別者」が「共犯者」を呼び込む「同化行為」によって「われわれ」対「被差別者」という三者関係が作られ、「われわれ」が被差別者を「他者化」し「見下す」ことによって差別＝「排除」が成立する。これを本論と照らしあわせれば、ヤオイを差別する/されるという二者関係で捉えるのではなく、ヤオイ作者+ヤオイ読者という“解釈共同体”と見ることによって、そこに介入する一般の通念を含めた「われわれ」という見方が可能になる<sup>16</sup>

堀はこの定義付けにより、ヤオイの愛好家が「私はゲイに偏見を持っていない」という発言があったときに、その真偽の立証不可能性から被差別者の告発とのすれ違いがおこり、かみ合わない議論が生じてきてしまうことを回避することができるとしている<sup>17</sup>。

これらの前提に立った上で、堀はヤオイのもつヘテロノーマティビティ(異性愛規範)について、2つの点から指摘している<sup>18</sup>。それは性行為における「受け」と「攻め」の

---

<sup>14</sup> 堀あきこ、「ヤオイはゲイ差別か?」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、21-54頁。

<sup>15</sup> 佐藤裕、「差別論-偏見理論批判」、東京：明石書店、2005年、29頁

<sup>16</sup> 堀あきこ、「ヤオイはゲイ差別か?」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、28-29頁

<sup>17</sup> 同前、29頁

<sup>18</sup> 以下の指摘とそれに対する分析は、同前、34-37頁「ステレオタイプーヤオイのヘテロ

役割固定と「攻め」・「受け」に対する男性性・女性性の付加の2つである。

堀はこれらの特徴を抽出することで、異性愛者が異性愛コードで同性愛者を描くこととそれにより同性愛者が不可視化されて他者化されるという告発を行っているとしている。さらにそこからステレオタイプが情報を簡潔に伝えるからこそ力を持ち、また情報が共有されていいないとその表現は意味をなさない者だからこそ「ゲイを逸脱と見るステレオタイプ」はヤオイ作者によって書かれたものとして捉えるのではなく、そのステレオタイプが広く社会に認知されている社会的通念であることと捉えるべきではないだろうかという問題提議を行っている。

佐藤雅樹は同性愛者という立場からヤオイにひそむヘテロノーマティビティとして「報われないもの」として描くことを挙げている<sup>19</sup>。同性愛を「逸脱」と見る「勝手な価値観」によるからこそ悲劇的な結末という「美化」が行われるのだというものである。

これに対して堀は最近のヤオイではハッピーエンドが主流であることを踏まえつつも、彼の言う異性愛を絶対的とした表現であるかについては、ゲイコミックにも「ゲイであるがゆえの困難な恋愛を成就させる」<sup>20</sup>という物語が多いことを踏まえて考えるべきとしている。

溝口彰子はヤオイ作品における「俺はホモなんかじゃない」というセリフの中にホモフォビアが存在することを指摘している<sup>21</sup>。ヤオイ作品に度々あらわれるこのセリフは登場人物が自らを異性愛者であることを主張するものであり、「ホモである（＝男が好き）のにホモではない」という主張に「(ホモ)なんか」＋「(ホモ)じゃない」という二重のホモフォビアを読み解いている。

## 第二節 メディア論的分析

この節では、今回の分析対象であるテレビドラマについての先行研究をレビューしていく。まず第一項でテレビの機能や政治性等の分析を行った J.フィスクの先行研究のレビューを行い、第二項で記号論や映画批評の手法を用いて日本のドラマを分析した藤田によるテレビドラマ分析についてレビューを行っていく。

---

ノーマティビティ」をまとめたものである。

<sup>19</sup> CHOISIR 編「やおい論争合本」、自費出版、1994年。

<sup>20</sup>堀あきこ、「ヤオイはゲイ差別か?」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥—セクシュアリティの多様雨声と排除—』、東京：明石書店、2010年、37頁。傍点は原文のまま

<sup>21</sup> 溝口彰子、「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン—最近のやおいテキストを分析する」、『クィア・ジャパン Vol.2』、東京：勁草書房、2000年、193-211頁。



## 第一項 フィスクによるテレビドラマ分析

フィスクはテレビに対して文化を代表する一つの代理機関として、特に意味の誘発者として考察を行っており、その分析の出発点として「テレビジョンは潜在的に様々な意味で満たされた番組を放送しているが、テレビジョンはこの潜在的意味を、支配的イデオロギーの作用を実際に行使するより単純な好ましい意味へと制御している」<sup>22</sup>という観念においている。そして彼は分析の目的を「社会のなかで支配的な集団の利害に合致する意味を、いかにしてテレビジョンが作り出しているのか、あるいは作りだとそうと試みているのか、更に視聴者が所属する数多くの社会集団に対してこうした意味作用がどう流布しているのか」<sup>23</sup>としている。彼はドラマのあるシーンを抜き出しつつ、重要な事として「現実」とは既に、常にコード化された現実であり「生」のままではなく、このコード化された現実の一部がテレビで映し出される時、そのメディアの技術的コードと表現的規約性が現実を技術的に送信可能なものとしつつも他方で現実を視聴者にとって分かりやすい文化的テキストにするとしている<sup>24</sup>。

そしてフィスクはテレビ番組同士の相互テキスト性について、「水平的な次元」と「垂直的な次元」の二つの次元で観察をしており、前者では主にジャンルについて、後者では第二次-第三次テキストの読解を行っている<sup>25</sup>。

## 第二項 藤田によるテレビドラマ分析

藤田は記号論を用いてフジテレビ系列で1997年に放送されたドラマ「Gift」の分析を行い、その結果を一冊の本にまとめている<sup>26</sup>。彼はテレビドラマのテキストは孤立して存在するわけではなく、他のテキストと相互作用しあっていることに注目している。その本の中でフィスクとクリステヴァを引用しつつ、相互テキスト性について三つの意見を述べている<sup>27</sup>。第一にドラマのテキストはすべてが制作者によるものではなく、フィスクの指摘する「ジャンル」等の他のドラマテキストにより支えられている事、第二に、テレビドラマは多くが「現

---

<sup>22</sup> J.フィスク、「テレビジョン・カルチャー」、伊藤守ら訳、千葉：梓出版社、1996年。4頁

<sup>23</sup> 同上、同頁

<sup>24</sup> 同上、9頁

<sup>25</sup> 同上、165頁

<sup>26</sup> 藤田真文、「ギフト、再配達-テレビ・テキスト分析入門-」、東京：せりか書房、2006年。

<sup>27</sup> 同上、177-178頁。

実の社会」を舞台としているが故にドラマの中の現代社会像の形成はテレビニュース、情報番組等の他のテレビ・テキストが関連している可能性がある事、第三にクリステヴァの「深層テキスト(ジェノ=テキスト)」という言葉のようにどこで表明されたのかも定かではないような様々なテキストがテレビドラマのテキストを支えており、これはマス・メディアのテキストに潜在する「イデオロギー」や「無意識」という概念とも関係している事を指摘している。

藤田は第一に挙げたドラマ間の相互テキスト性の問題について、「閉じた約束事」として土田の分析枠組み<sup>28</sup>である三つのレベルを用いて分析を行っている。これは①一般的な相互テキスト性②制限的な相互テキスト性③自己内部的な、あるいは自己的な相互テキスト性の三つである。

①について藤田は物語装置としての「記憶喪失」に注目し、それが物語の構築にどのような影響を与えているかを分析し<sup>29</sup>、②については制限的な相互テキスト性として「脚本家」と「出演者」という二つの視点から分析を行っている<sup>30</sup>。③について藤田はエディプス・コンプレックスや男性性をめぐる食い違いなどからテキスト内の矛盾について論じている<sup>31</sup>。本論文では①と②と類似した分析を行う。これらを中心に扱ったのは、本論文が多様なドラマを扱うにあたり、③のような要素への注目が難しかったという理由がある。

## 第四章 男性同性愛者のテレビドラマ分析

ここまで、先行研究レビューとして社会学とメディア論のレビュー行ってきたが、ここからは実際に現代の男性同性愛者を題材としたドラマの分析を行っていく。本章ではまずドラマの中でのホモフォビアについて、古川や風間らの研究を参考に分析を行っていく、続けて、テレビドラマについて、メディア論的な視点から分析を行っていく。

### 第一節 テレビドラマにおける男性同性愛者とホモフォビア

本節ではドラマの中での男性同性愛者と周囲の関係性について注目して分析を行っていく。まずは幾つかのキーワードをもとに各ドラマでのシーンを列挙し、最後にまとめて分析する。

---

<sup>28</sup> 土田知則・神群悦子・伊藤直哉、「現代文学理論 テキスト・読み・世界」、東京：新曜社、1996年、173頁

<sup>29</sup> 藤田真文、「ギフト、再配達-テレビ・テキスト分析入門-」、東京：せりか書房、2006年、180-184頁

<sup>30</sup> 同上 184-187頁

<sup>31</sup> 同上 7章・8章

## 第一項 当事者以外によるホモフォビア

まず当事者以外によるホモフォビアとして代表的なものとして、周囲の人からの偏見や無理解からくる言動がある。本項ではそういったものにはどのような種類があり、それにどのような背景があるのかについて分析していきたい。

### ① 誰かへの好意と男性全体への性的な感情の混同

今回の研究で見られた現象としてある男性が同性愛者だとわかるか、そうである可能性が出た時、その場にいた全員がその人物から性的な目線で見られているように振る舞うということが挙げられる。

たとえば「花ざかりの君たちへ」の2007年度版では第3話で嘘発見器を使うシーンがあるが、そこで中津が「女より男が好きだ」・「好きな人がこの寮にいる」・「好きな人は第二寮にいる」という質問に「いいえ」と答えるものの機械が反応してしまう。その際にはその場にいた全員が彼と距離を置き、質問が進むごとに彼に好意を持たれている可能性がある全員がさらに距離を置くようになる。また、第5話では中津が芦屋に対する好意を口にした際に周りの男性陣が股間を隠す仕草を行う。

そのほかにも同じイケメンパラダイスの2011年版では中津が芦屋にたいして好意を持つことを明らかにしている中で、そのことを改めてはっきりと宣言すると周りが急に黙って引いている様子も描かれている。

特にこの例は二つとも全寮制の男子校を舞台にしている。これは前川や川口らの研究において研究の対象となっていた空間に類似しており、上に挙げたシーンは異性愛者男性しかいないと思われていた空間に男性同性愛者が「混じって」いることに対する異性愛者側の対応の具体的な事例として現れている。

### ② 当事者に関わった人に向けられる差別

ここでは当事者ではなく、その周辺人物、特に家族に対して向けられた偏見や差別について見ていきたいと思う。

まず家族については以下に示す二つの例がある。

「誰よりもママを愛す」ではゲイであるピンコの兄弟が現れ、彼に対して敵対感情をあらわにするがその理由として妹の結婚がダメになったこと、家族が「恥ずかしい思いをした」ことを挙げている。また「佐々木夫妻の仁義なき戦い」

に於いては、猪木の元妻である聡子と二人の息子鉄博の二人が周囲から笑いにされ、息子が学校でいじめられていることを告白する。

家族以外にも、その人物と関わっているだけで同性愛者とみなされるケースがある。「タンブリング」では新体操部の部員の一人である水沢が同じ部員の木山に対して恋愛感情を持っていることが周囲にばれてしまうシーンがある。その後新体操部は他校の生徒から「ずいぶん仲がいいんだなもしかしてお前もコイツと同類ってか」と言われ、同じ高校の女子たちが会話の中で「男子ってさマジでみんなそっち系だったりして」と笑うシーンがある。

こういったシーンには、大きく分けて三つの問題が混在している。一つ目は同性愛者自身に対する社会的な蔑視、二つ目は当事者が同性愛者であると気づいたことが「逸脱」として見られ、その責任や非難が当事者はもちろん、周囲の家族に向くこと、最後の例に見られるように男性同性愛者と一緒にいる男性が同性愛者とみなされることである。とくに後ろの二つについては、人が同性愛者になるかどうかは周囲の環境や教育に依存するという価値観や、周囲に同性愛者がいる場合にまるで「感染」するかのように同性愛者が増えて行くというような見方を指摘することができる。

## 第二項 当事者自身によるホモフォビア

今回分析したドラマでは、自らが同性愛者だという事実を前から認識している人物や、反対に自分の性的指向をドラマの途中や、始まる直前に認識し、受け止めることができている人物もいる。どちらにも見られる傾向として、自らのセクシュアリティを否定するようなホモフォビックな発言をすることがある。これらの発言については、第3章の先行研究レビューにおいてヤオイ作品に潜むホモフォビアについて分析した論文を引用したが、ここでは同様の構図がドラマにおいても見られることを指摘していく。

こういった指摘に対して、「同性愛者であることを自覚したがゆえに焦りや混乱が生じているだけ」という反論が予想されるが、本研究ではそういった混乱の存在否定するわけではない、事実男性同性愛者が自らのセクシュアリティに対して悩みを抱えることはデータとしてあげられており、メンタルヘルスに不調が見られる割合は一般の値と比べて46.6%と26.5%と多くなっている<sup>32</sup>。ただ、

---

<sup>32</sup>日高庸晴・嶋根卓也、「REACH ONLINE 2011」<http://gay-report.jp/2011/index.html>  
閲覧日 2014年12月20日

そのような混乱の背景には同性愛者の生きづらさがあり、それをより増幅させるような表現について指摘することはまた別の問題である。

### ① 「ただ〇〇を好きになっただけ」という言葉

溝口がやおい作品においての当事者からとして出した言葉として「俺はホモなんかじゃない」という発言を例に出しているが、今回の分析対象の中で見ることのできる似た言葉として「ただ〇〇を好きになっただけ」という言葉がある。

具体例としては「花ざかりの君たちへ」の2011年版で中央が先輩への好意についての独白で「言っとくけど僕男なら誰でもいいってわけじゃないんだからねたまたま好きになった人が難波先輩ってだけなんだから」というシーンを上げることができる。

こういった言葉は本章の第1項でもあげたような男性同性愛者が男性全員に好意を持つという偏見を前提にしている可能性や、同時に男性を好きになることに対することへの罪悪感や、「(自分は異性愛者だが)ただ〇〇を好きになっただけ」というようなあくまで異性愛者であるが偶然一人の男子を好きになっただけという逸脱としての見方などの問題をはらんでいる。

### ② 同性を好きになることへの自己卑下

今回の分析対象の中には、上に挙げたような発言の他にも、同性を好きになった自分に対する否定的な発言も見られた。例えば上にもあげた「花ざかりの君たちへ」の中央は2007年版で先輩である難波をすきなことについて「キモいよな？」と自分で語っており、「素直になれなくて」の市原も友人である西村に自分が男性である中島を好きであることを打ち明けた後に「ハハッ引くよね」と発言をしている。それ以外にも「タンブリング」の水沢が「自分でも分かってる。俺、俺キモいよなあー。でも、でも、どうしようもないんだ。どうしようもないんだよ。」と部活の同期である木山への思いについて発言している。

こういった発言は同性愛者の生きづらさを代弁するような発言であると同時に、先行研究紹介の部分でも引用した溝口の「俺はホモなんかじゃない」という発言にみられる潜在的ホモフォビアと類似した特徴を持ち、また後述する「叶わない恋」というイメージと結びつくことで視聴者に偏った見方を提示することにもつながる。

### ③ 女子と付き合うことでの「矯正」

今回の分析対象の中には、自らが男性同性愛者であるかもしれないことを自覚した時にとっさに女性と付き合おうとする人物が散見された。

具体的には「誰よりもママを愛す」の明、「佐々木夫妻の仁義なき戦い」の小川信司、「タンブリング」の水沢という三人が同性に対する恋愛感情に気づいた登場人物が女性と付き合うことで自らが異性愛者であることを確認して安心しようとする。しかし結果としてはどれもうまく行かず、結果として相手への気持ちに確信を抱くことに繋がっている。

これらの例で注目すべきポイントは、前掲した小川の「女の子と付き合ったらさ元に戻るかな～なんて思ってた」や、水沢の「最初はそんなはずないって何度も自分に言い聞かせた。無理やり女の子ともつきあってみた」という発言から読み取ることができる。それは異性愛規範において、女性が好きであることが異性愛者であり、男性が好きであることが同性愛者であるというイメージができてきていることである。このことについては「花ざかりの君たちへ」の中津が2007年版で芦屋に惚れた後に女性の下着を見て興奮したことで「女好き一俺は女好きホモじゃないホモじゃないホモじゃない」と踊りだしたり、2011年版の中津が元々は「女好き」と言われていたのが芦屋への好意をあきらかにしたことで「男好き」と周りから称されるようになったりすることも同様の例としてあげることができる。

こういった見方は男性同性愛者に対する差別や偏見というよりも、両性愛者や無性愛者の存在を言外に無視してしまっている。具体例として「佐々木夫妻の仁義なき戦い」の猪木も元々は妻子がいたものの、「男に目覚めた」あとは男性としか付き合わなくなることや、第二節第二項でも述べるように「女嫌い」や「女性と性行為ができなくなる」ことが「男好き」と同一視されるような扱われ方をすることも上げることができる。これらは男性を好きになることと、女性を好きになる可能性の消滅は別であるにもかかわらず混同されていることを示している。

## 第二節 テキスト分析

続くこの節では、相互テキスト性の分析として、今回のドラマの中に共通してみられる特徴について例を挙げつつ説明していく。

## 第一項 「叶わない恋」という終着点

今回の分析対象である 17 人の中について第一にあげられる特徴が「叶わない恋」という終着点である。17 人のうち、特定の個人に対して恋愛感情を持っている人物が 12 人いる[表 1 の No1・2・3・5・7・9・11・13・14・15・16・17](この中には女性であることを隠して過ごしていた芦屋を、男性と誤解しつつ好きになり、告白の結果を聞いた後に彼女が女性であることを知る中津[No.5.13]も数に入れることとする)。そのうち、実際に相手に好意があることが何らかの形で伝わったのはそのうち No.17 の六道誠之介を除く 11 人であるが、その中で実際に相手と交際することになったのは 1 人[No.2 のピンコ=山田一郎]だけである。それ以外の多くはずっと片思いのままで「そばにいてだけで幸せ」という趣旨の発言をしたり[No.2・3・11]、相手に気持ちを理解してもらってはいるものの振られてしまったり[No.5・9・13・14・15]してしまうことがほとんどである。また、誰かに好意を持っていない場合でも、自らの持つ好意が叶わないということが言及されていることがあり、前段落で挙げた 11 人から外れている No.8・10 の岩井善治は「初恋がかなわぬ恋と分かった感じとちゃうか？」という発言している。

これらの特徴を第三章第一節第三項でのヤオイの現状と比較すると、ヤオイはすでに「悲劇的結末」から「ハッピーエンド」へと大多数が移行しているのに対し、テレビドラマにおいては未だに「悲劇的結末」が圧倒的多数を占めている。この違いは未だに男性同性愛者の社会的な生きづらさを象徴するものの一つであるといえる。

## 第二項 「男性性」の喪失

続く本項では今回分析したいいくつかのドラマで見られる特徴であった「男性性の喪失」というモチーフに注目して見ていきたい。男性同性愛者がテレビドラマの中で登場するとき、肉体面・精神面などにおいて男性に期待される機能に問題を抱えている事例が今回の分析から読み取ることができる。

### ① 素直になれなくて

最初の例として、「素直になれなくて」での例を提示していきたい。このドラマでは市原が職場の上司である奥田にキスや性行為を強要されるセクハラ・パワハラを受け、ED になってしまう。そのさなか、SNS がきっかけで知り合っ

た友人の一人である中島に好意を持つようになる。彼の勃起障害については第1話ですでに西村という女性と性行為に及ぼうとするのだが、市原が勃起せず結果として性行為は行われぬ様子が描かれており、その後奥田と性行為に及ぼうとした時も勃起しなかったことから、彼は医師の診察を受ける。そこで ED であることを告げられるが、奥田が中島に対して仕事と引き換えに性行為を要求しようとしていることを知ったため、中島をかばう目的でバイアグラを飲んで奥田と性行為に及ぶ。その結果中島がセクハラをされること事態は回避するものの、エスカレートする上司の要望に耐えられず、市原は会社を無断で休み、その後復帰するものの居眠りをしていた中島に触れたことで中島に好意がばれ、結果として自殺を図る。これは未遂に終わり、そのことを市原も反省するのだが、のちに容態が急変し最終的に市原は死亡する。

この例では、「ED」という肉体的な男性性的機能の欠落と時を同じくして、市原は同性である中島へと好意を持つようになる。またこの例の他にも、本ドラマにおいて中島は医者かつ大学の名誉教授である父を持っており、彼に開業医として成功している兄と比較されたり、見合いの話を持ってこられたりなど、家父長制の価値観の中での男として認められないことが強調されるシーンが散見される。

## ②花ざかりの君たちへ

続いての例として「花ざかりの君たちへ」というドラマについて見ていく。このドラマは 2007 年度版と 2011 年度版があるのだが、男性に好意を持つ人物はどちらも変わらない。今回注目したいのは 2007 年度版の梅田である。梅田は 2011 年度版では彼にフォーカスを当てたシーンは少なく、また 2007 年度版で見られた同性愛者になった「理由」について語るシーンも 2011 年度版ではなかったため、2007 年度版のみに注目していきたい。

このドラマにおいて、保険医である梅田は同性愛者なのだが、第 3 話で梅田の知り合いであり彼が「男に走った」きっかけでもある原秋葉という女性との以下のような会話がある。

原「あの人大学の時美女を目の前にして、怖じ気づいちゃって男に走ったのよ」

梅田「美女？誰が美女だ？ 大体泥酔して野獣化したお前がいきなり襲いかかってきたのがトラウマになったそれがすべての始ま



りだろうが！」

以上の会話から、ここで元々は異性愛者だった梅田は原に性行為を強いられたことでトラウマとなり、原が近づくだけで蕁麻疹やけいれん、吐き気などを催すような女性恐怖症となり、その結果男性に好意を抱くようになった。という女性恐怖症が同性愛に結びつけられて考えられていることがわかる。

### ③シェアハウスの恋人

3つ目の例としてあげられるのが「シェアハウスの恋人」というドラマである。このドラマではエリートサラリーマンであった櫻井が自殺しようとしていたところを助けられた川木という男に好意を抱くというところから始まる。この櫻井はもともと妻子とともに東京に暮らしており、その家庭は専業主婦の妻と会社で働く夫という近代的な性役割に基づいたものである。ある日櫻井は職も家族も捨てて蒸発し、コンビニのアルバイトにつくが元来の短気な性格から首になってしまい、最終的にはホームレス生活を送ることになる。その後前述したように自殺しようとしたところを川木に救われ、もう一人の主要登場人物である津山と一緒にシェアハウスで暮らすようになる。

最終的に櫻井は妻と再構築を行うのだが、その前に川木と櫻井とで櫻井が好意を抱いていたことについて以下のように話し合う場面がある。

櫻井「今まで俺は真面目に生きてきた。」

川木「はい。」

櫻井「だが人生を踏み外した挙句転がり込んだあの家であんと出会った。」

川木「はい。」

櫻井「俺はあんたをいいやつだと思い、心が動かされた。ひとに惹かれる感情をあんたは思い出させてくれた。おれはそれを「好き」という言葉に置き換えたんだと思う。」

これらの発言から、これまでの性別役割分業が定まっていた中で暮らしていた櫻井が男に好意を持つようになったのは、その役割を放棄したことが大きなきっかけであることが伺える。

ここまで3つの事例を見てきたが、いずれもなんらかの形で「男性としての役割」を続けることが不可能になり、結果として同性愛者に「変わっていく」という記述がされている。これは「男性として不適合」や女性との性交渉に及べない人物が「同性愛」という逃げ道に「走った」とも言い換えることができる。

この考えを裏付けるようなものとして、②での「女性恐怖症の克服」と③での「戻った」発言という二つの例がある。

②である「花ざかりの君たちへ」の2007年度版において、梅田は女性恐怖症に悩まされており、その根源である原に触れると蕁麻疹が出るほど彼女のことを忌み嫌っていた。しかし最終話ではその女性恐怖症を克服し、彼女に触れても蕁麻疹が出なくなる。その時に梅田と原は以下のような会話をかわす

原「あれ？けいれんとかじんましんとか出ないの？ちょっと！女嫌い治ったんじゃないの？ちょっと！」

梅田「かもな」

原「もう一回彼女になってあげてもいいわよ」

梅田「考えとく」

原「ちょっとなんか意外」

この会話からも見て取れるように、梅田の「同性愛」は彼の女性恐怖症の終了とともに終りを告げる。言い換えるならば彼の「同性愛」は一時的なものであり、女性と接触できるようになったのであれば、もとのヘテロノーマティビティにしたがって異性愛者に戻る事が前提とされているのである。

続いて③の「シェアハウスの恋人」では、先述のように櫻井本人によって「好意」は「人生を踏み外した」結果であると説明されていた。そのシーンの直後に、二人の会話を遠目で見ていた櫻井の妻(真希)ともう一人の同居人である津山との会話がある。「あの人(櫻井)随分変わったわ」という真希のつぶやきに対し、津山が「変わったっていうか元に戻っただけじゃないですか？」と発言している。この後、まさしく津山の発言の通り、櫻井の家族は元に戻り、最終回では息子の入学式に夫婦で参加する。男性が好きだったことも「元に戻った」ことで終わったとされるのである。

これは異性愛から同性愛に一旦は「踏み外した」櫻井が、同居人との交流を

通じて、元(=異性愛者)に戻ったということを示している。この例の他にも、このドラマでは櫻井の息子である空知という少年が出てくるのだが、津山は彼との間に「空知くんの入学式までにカッコいいお父さんに戻してあげる」という約束を第1話で交わしている。この約束も先程同様に、矯正される対象として同性愛が語られ、最終的には異性愛に「戻る」べきという考えに基づいている。

ここまで「男性の喪失」→「同性愛者になる」という構図についての検証を行ってきた。この構図自体にヘテロノーマティビティが前提として置かれていることがまず大きな問題である。さらにこれらの構図は「逸脱」としての同性愛、「いつか治るもの」としての同性愛という、偏見に満ちたモデルを提示しており、当事者である男性同性愛者にとって大変差別的な内容となっている。

さらに警告すべき点として、①のように「ED」と同性愛を結びつけてしまうことや、②のように「女性恐怖症」と「同性愛」を同じものにとらえることによって同性愛を病理化してしまうことも大きな問題としてあげることができる。

### 第三項 極端な女性らしさと男性らしさの強調等

この項では、男性同性愛者に対してテレビドラマがいかにか女性的なイメージ付けを行われているのか、その一方でそういったドラマで描かれる「オカマ」に対して、同時に極端な男性らしさも付与されていることを明らかにしつつ、その他にも男性同性愛者に対して与えられるイメージや特徴について具体的な例を用いて分析を行っていききたい。

#### ① 誰よりもママを愛す

このドラマでは、ドラマの中心となる嘉門一家の長男である明と、彼に惚れるオカマバーの店員であるピンコの二人に注目してみていきたい。もともと明は外見のよさと優しい性格と、もともとの断れない性格から様々な女子と不本意ながらにある状態になってしまっており、ある女性にしつこく付きまとわれていたところをピンコに見られたところで二人は知りあう。ピンコは最終的に明を好きになり、明もその気持ちを受け入れて彼と彼の実家のある岡山で桃の栽培を始める。今回はその明とピンコについて、順番に出てくるシーンからその特徴について見ていきたい。

明の注目すべき点としてもともと女性性が強調されていたことと、ピンコと関わっていくとともに女性らしさが強調されていく点にある。

第1話では家族の末っ子である薫がナレーションをしつつ紹介するのだが、長女である雪に対しては「お姉ちゃんはドラマの長男みたいに単細胞っていうか喧嘩っ早くて僕がいじめられた時なんて…(回想:いじめっ子をやってている長女)」と紹介され、それに対して明は「美容師のお兄ちゃんはドラマの長女みたいにどんな時も冷静で優しく僕が落ち込んでいると…(回想:おねしょした薫を励ます明)」という紹介のされ方をされている。またもともとこのドラマは専業主婦である一家の父一豊と弁護士として家を支える千代が中心となる家庭が舞台となっており、近代的な性役割を逆転したような状況にある。そういった中で「料理が一切出来ない雪」と「普段から料理を手伝っている薫」や、「喧嘩の得意な雪」と「何をしたらいいかわからず戸惑う薫」という比較されるようなシーンが出てきている。

また、ドラマの途中では彼がピンコと一晚を過ごすシーン（実際にはその時の二人には何もなかったと後々明かされる）があるのだが、その後の家族の食卓にてピンコと付き合ったのかと聞かれる際に彼の小指が立っており、それを家族みんなが見て笑うシーンがある。その他にも最終話では岡山でピンコと明が桃農園の他の人たちと会話をするシーンがあるのだが、そこで彼は「あらお上手ねえヤダもう」と女性的な言葉で喋るように変わっている。

続けてピンコ(山田一郎)について見ていくが、そこで注目すべき点としては一貫した女性らしさと男性らしさの強調にある。ここでは、女性らしさと男性らしさの事例を順々に見ていく。

もともと明の勤めていた美容室の客として初めは登場するのだが、初登場のシーンから「いいの？あんなこと言って、罪よね」と女性らしい言葉遣いであり、その後の登場シーンでも美顔・美脚・美肌をうたうエステティックサロン「女神」から出てくる様子が描かれ、自分のことを「アタシ」と呼ぶ。また明の家族と初めて関わるシーンも、一豊に料理を教えるというものである。そしてそこで明はピンコの事を「彼」と一旦言ってから「彼女」と言い直している。ドラマの終盤では、ピンコは明のことを思って離れようとするが、その一連のシーンの中でピンコがショーウィンドウのウェディングドレスに目を奪われるシーンがある。その後、家族に見守られて家の中で擬似的な結婚式を行うのだが、スーツを着た明と対照的にピンコはブーケを持ち、全身白い服に身を包む。

男性らしさの強調という意味では、ピンコはドラマに出てくる他の男性の誰よりも肉体派として活躍する。第4話では明の姉である雪に好意を持つ山下と

いう男性が借金取りに暴力を受けるシーンがあるのだが、そこで手をこまねいている明と一豊を尻目に、ピンコは借金取り3人を相手し、最終的に逃走はするもののやりあうことができている。また第7話では雪がナンパされた男性に連れて行かれたクラブで襲われそうになり、それを聞きつけた明達が助けに行くのだが、そのシーンでも中心となって相手をしているのはピンコである。

また、このドラマではこの二人以外にも端役としてでてくる男性同性愛者や彼らが集まる空間としてのゲイバーがあり、それらもこの項で触れておきたいと思う。主にピンコの勤めるゲイバー「ふきだまり」とそのママであるレーコについても書いておく。このドラマでは明がピンコに連れられるなどしてゲイバーに行くシーンがあるのだが、そのシーンにおいて映される「ゲイ」はほぼ全員が女装した男性である。また、バーのママであるレーコもピンコと会話するシーンがあるため数回登場しているのだが、常にカツラや着物などの女性的な服装をしている。しかしここで男性性の強調として引用したいのが、レーコがアキラの美容室でピンコと話す第6話のシーンにおいて、レーコは「ビシッとヤローっぽく刈り込んで頂戴、お願いよ」と美容師に対して注文をつけている。

## ② のだめカンタービレ

このドラマでは、主人公の一人である千秋真一に好意を持つ奥山真澄について注目をしていきたいと思う。真澄は千秋と同じ桃ヶ丘音楽大学のティンパニ科に所属しており、物語のはじめのほうでは選抜オーケストラであるAオケに所属するが、千秋にいいところを見せようと暴走し、結果として千秋の関わるSオケに所属することとなる。真澄は千秋に対する好意を常に公にしているが、千秋はそれを常にあしらっており、真澄も最終的に千秋がヒロインである野田恵(のだめ)を選んだときにも「いいのよ、元々見つめるだけで精一杯だったんだもの。それがこんなにも千秋さまと仲良くなれたのはのだめのお陰なのよね。」と発言するなど、真澄自身のもとより諦めてしまっていることがわかる。

ではドラマの中での真澄について女性らしさの強調という面で見していきたい。真澄は常に「お黙りなさい！」や「○○だけよ」という一貫した女性らしい言葉遣いや、いわゆる「女の子走り」で走る姿が見られる。また真澄の身の回りにあるものについても、くしや鏡にラインストーンでハートマークなどのデコレーションを行ったり、ピンクの髪留めやリボンを身につけたりしている。ま

たドラマの中ではオーケストラが仮装をしながら演奏を行うシーンがあるのだが、そこで真澄はののために「ポリニャック夫人」と言われるようなゴシックなドレスを自作するのだが、その色はピンクであり、その出来栄えものためのつくった着ぐるみよりもよく、真澄が裁縫を得意としていることがうかがえる。また千秋の気を引きたいののために、(そこではあえて失敗し、ののための印象を悪くしようとしているが)メイクをレクチャーしているシーンもある。他にも真澄はティンパニの技術を高く評価されているが、そこから「打楽器の女王」と呼ばれている。

### ③ 花ざかりの君たちへ (2007年度版)

「花ざかりの君たちへ」というドラマは先述の通り二度にわたって内容を変えて放送されたが、この項ではどちらも中央千里という人物に注目していきたい。彼は同じ寮の先輩である難波南に好意を抱き、常にそれを公にしているものの、上で挙げた真澄同様にずっとあしらわれ続けている。

彼の特徴としては、女性らしい描かれ方と、また自分自身の可愛さに自信を持っていることを挙げることができる。第1話では転校して注目されている芦屋瑞稀に対して足を引っ掛け、「ちょーっとかわいいからって調子のってんじゃないよ 僕の方が数段かわいいんだから」といい、その後も「アメリカだかアメ横だか知らないけど、どうせたいした記録じゃないんでしょ？」と敵対心をあらわにする。自分のかわいさに自信を持っていることについては、第3話で下着泥棒の話が出ている時も「やだ僕がいちばん気をつけないと」とこぼしている。女性らしい言動についてはダンスパーティーのシーンで女装をして難波と踊ろうとし、彼が寝間着としてピンクのリボンのついたカチューシャとネグリジェのようなワンピース型の身につけていることが例としてあげられる。

### ④ 佐々木夫妻の仁義なき戦い

続いて見ていくこのドラマでは、主人公の一人である小雪演じる佐々木律子の親友である猪木鉄男について注目していく。このドラマにおいて猪木はもともと妻子がいたもののある日(ドラマの表現をそのまま抜き出すと)「男に目覚め」てしまう。その結果妻と離婚し、親権も取られてしまう。その後元妻が仕事に手一杯になってしまっていることを知り、再婚はしないものの関係を修復する。また彼はドラマの後半では律子のアドバイザーであると同時に、律子が夫であ

る法倫のもとから子供を連れて別居した際に彼女のサポートをおこない、二人が行う親権を伴う離婚調停においても重要な役割を果たす。

彼について見ていくべきポイントは妻との結婚における役割分担とその後男性に好意を持つまでの経緯と妻との関係修復についてである。

まず彼は妻である聡子と結婚した際、彼女が設計の仕事が続けたかったため、子供を保育園に入れようとするのだが、その際に仕事に執着のなかった鉄男が仕事を辞めて主夫をやると言い出す。その選択は二人にあったのだが、5年たった時に道で出会った男性と手が触れたことで「男に目覚める」こととなる。ここで注目すべき点として、法倫はこの経緯を「家事に目覚めると同時に、男にも目覚めちゃったんだ」と表現している。

その後、子供の世話をおろそかにしていた聡子と言い争いをするのだがその際に聡子は鉄男に「女ことばでがなんないでよ」と叫び、鉄男が原因で自分たちが笑い者になり、子供も学校でいじめられたことを明かし、最終的に子育てが上手で家事が上手でも彼と暮らすことを「子供の福祉に反する」とする。

また、このドラマであわせて注目しておきたいのが、法倫の学生時代からの親友である小川信司である。彼はもともと男性に好意を持つことはなかったのだが、ドラマの途中から鉄男に好意を持つようになる。その際に法倫の事務所の女性に声をかけ、のちにそのことを「女の子と付き合ったらさ元に戻るかな～なんて思って」とこぼしている。そして彼は猪木に惚れると同時に小指が立つ描写がされるようになる。

## ⑤ BOSS(シーズン1・2)

BOSS では2つのシーズンにわたって登場する岩田善治について注目する。ただ彼については後の第3節で詳しく記述するため、ここではどう描かれているのかを概観していきたい。彼はシーズン2で女性的な側面が強く描かれ、自分の上司である大澤にたいして韓流スターの魅力を語ったり、裁縫の腕を彼女と勝負して圧勝したりしている。またその他にも女装するシーンが数度登場し、女子校に通いたい、自分が女の子になればいいなどの発言をしている。

また男性的な面の強調として主にシーズン1では筋トレをするシーンが登場し、タンクトップや革のジャケットを身につけていることが多くなっている。

## ⑥ 花ざかりの君たちへ(2011年度版)

ここでは2007年度版同様に、中央千里に注目をしていきたい。2007年度版と大きな違いとして、2011年度版ではより女性性と男性性の強調が見られるようになっている。彼が自らの可愛さに自信を持っていることと同じ寮の先輩に対して片思いをしていることは変わらないのだが、女性的な要素が増え、男性的な要素が新しく加わっている。

まず第1話で瑞稀に絡むのは変わらないのだが、そこでピンクの手鏡を持ちつつ瑞稀の前髪を直し、「うん、僕の次にカワイイ」とこぼす。このピンクの手鏡の他にも、このドラマを通じて中央は他にもピンクの扇子や日傘、ハートマークのうちわなどのいわゆる女性的な小道具を多用している。このほかにも瑞稀と仲直りした時に中央は仲直りの印に化粧水を貸してあげてを提案するシーンや、中央が好意を持つ先輩が元彼女と出会った時、二人の間柄を予想する際にその根拠を「乙女の勘」と自称し、同じ回の体育祭のシーンで先輩の鉢巻にハートや「LOVE」といったデコレーションをし、その後も同じ先輩にハート型で「LOVE」という文字の入ったピンクのレースで縁取りをしてあるものをお守りとして渡している。それと同時に男らしい仕草についてもダミ声でまわりに「ぶっ殺すぞ!」と毒づくなど、2007年度版ではなかったような動作が追加されている。

## ⑦ クレオパトラな女たち

このドラマでは、主人公である峯田は親の借金返済のために美容整形外科で働くことになり、同時に借金返済を少しでも早く終わらせるために中高の同級生である黒崎のアパートに居候をする。黒崎は峯田に好意を持ち、プライベートではゲイであることを公にしている。

峯田は家事全般を黒崎に頼っており、家での料理はほとんど黒崎がしている。そのことについて日本テレビの公式サイト的人物紹介でも「家事全般も担当し、妻のように峯太郎に尽くす。<sup>33</sup>」と表記されている。ここで同時に注目したいのが、公式サイト黒崎に関する文章で「見た目は普通の男だし、女装趣味はないが、男しか愛せない。」<sup>34</sup>と書かれていることである。実際黒崎は家事を主に担当するものの、こういった面で女性になりたい男性と男性同性愛者の混在が

---

<sup>33</sup> 「相関図 | クレオパトラな女たち | 日本テレビ」、日本テレビ  
<http://www.ntv.co.jp/cleo/chart/index.html>、閲覧日 2014年12月20日。

<sup>34</sup> 同上



起きていることが伺える。これに関連して峯田と黒崎の会話で黒崎が女性の気持ちができるという旨の発言をした時に峯田は「お前も女だな」という発言をし、それに対し黒崎は怒りをあらわにして「俺は女じゃないよ」と詰め寄り、峯田もそれに対して謝罪している。

ここまで、いわゆる「オカマ」や「オネエ」という言葉につながるような男性同性愛者の女性的イメージなどについて見てきたが、その傾向や内容について今一度振り返っていききたい。

ここまでような男性同性愛者はドラマで描かれる際に、ピンク色やハートマークなどのモチーフが用いられ、そのほかにも料理や裁縫などの家事の面で「女性よりも女性らしい存在」として描かれる。特に男性同性愛者が家事や化粧などの「女性が得意である」と想定されるものを得意としているイメージは、時折それが得意ではない女性と対比する形で描かれる。前掲した「誰よりもママを愛す」の雪と明とピンコ、「のだめカンタービレ」ののだめと真澄、「佐々木夫妻の仁義なき戦い」の猪木鉄男と聡子、「BOSS」の大澤と岩田、「クレオパトラな女たち」の市井と黒崎をそういった例に上げることができる。

だが、そのままでは男性同性愛者とトランスの当事者は見分けがつかなくなる。そのために同時に「男らしさ」を強調することで彼らがあくまで「女性的な男性」であることを強く印象付けている。また、こういったことが彼らを可視化できる存在だと認識させ、異性愛者男性にとっていわば「安心」な環境を作り上げている。それと関連した問題として「女性になりたい男性」と「男性同性愛者」が混同されてしまっていることも問題としてあげられる。なぜならそのトランスとゲイという全く異なるものであるにもかかわらず、オネエやオカマと言われるようなテレビに出てくる同性愛者は「彼女」などの女性的な代名詞が用いられ、女装などのシーンがあることで二つが混同されかねないような描写することもある。電通総研が2012年に行った調査では「おねえ系」タレントへの支持率はトランス当事者が最も低くなっており、こういったことが関わっていることが予想できる<sup>35</sup>。

これらは結果として異性愛規範における「女性」的役割に「男性同性愛者」が当てはめられるという異性愛規範中心の考え方の表れのひとつであると同時に

---

<sup>35</sup> 「電通総研 LGBT 調査 2012 データ・グラフ集」、電通、  
<http://dii.dentsu.jp/project/other/pdf/120701.pdf>、閲覧日 2014 年 12 月 20 日。

に、「同性愛者同士」によるカップルの存在はほとんど想定されておらず、「男性同性愛者は異性愛者男性に好意を抱く」・「男性同性愛者は女性や女性になりたい男性と混同されうる存在である」という前提の可能性を読み解くことができる。またこういった女性的な男性同性愛者については、既存の性役割の視点から異性愛者男性にとって自らの性役割を危ぶむようなものではない存在として捉えられる可能性もある。

そのほかに、「佐々木夫妻の仁義なき戦い」の猪木の例にあるように女性らしい特技(今回の場合は家事)に目覚めることと男に目覚めることをつなげて考えるようなセリフがあったことや、「誰よりもママを愛す」の明や「佐々木夫妻の仁義なき戦い」の小島のように異性愛者だと思っていた人物が同性愛者である可能性を感じた時に女性と無理やり付き合っただけでなく、そうでないことを確かめようとする、そして自分が同性愛者だという認識を持つと同時に小指が立つことが強調されたり、オネエ言葉で話すようになったりとまるで感染するかのようになり「異性愛者」から「オネエ」へと変化していくことも注目したい。

### 第三節 同一対象に対する表現の揺らぎ

この節では、藤田の先行研究での制限的な相互テキスト性の例として、同じ物語が二度にわたりテレビドラマとして映像化された「BOSS」について分析していく。このドラマはシーズン1・シーズン2という形で放映された。この本来同一対象を描いたはずのドラマでの表現の揺らぎを分析する事により、テレビドラマでの男性同性愛者に対するイメージを再確認するとともに、男性同性愛者に対するいくつかのイメージが混同されている現状を明らかにしていきたい。

#### 第一項 「BOSS」の事例

今回分析を行うのは2009年と2011年に2シーズンにわたって放送された「BOSS」というドラマであり、このドラマはシーズン1とシーズン2の間に設定として2年の間があるものの、主要キャストや設定はほぼそのままである。

このドラマの概要をフジテレビ内の文章<sup>36</sup>をもとにまとめると、警察内のはみだしものをまとめた部署として作られた「捜査一課特別犯罪対策室」のメンバーたちが事件を解決していくという、両シーズンとも全11話からなるシリーズ・ドラマである。

---

<sup>36</sup> 「BOSS – フジテレビ」、フジテレビ、[http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/BOSS/](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/BOSS/) より引用

今回の分析の対象となるのは、メンバーの一人であるケンドーコバヤシ演じる岩井善治である。彼は当初から男性同性愛者である事が様々なシーンで表されている。第一話の初登場のシーンでも、年下の刑事の尻を触ろうとし、対策室のメンバーに不満をもち、いったんは立ち去ろうとするも先ほどの刑事を見て「ま…ありか」という発言を漏らしてその場にとどまっておき、役を演じたケンドーコバヤシもニュースで自らの役について以下のように説明している<sup>37</sup>。

「オファーの際、プロデューサーから『ケンドーさんのキャラクターそのままにできるような台本も作っているの』と口説かれ、そんなありがたいことはないと思い、引き受けました。でも、いざ台本を読んだら、ゲイの役で『これどういうことやねん！ そのままの僕はゲイやったんか？』って（笑）」

彼の挙動については前章でも注目したが、本章で注目したいのは、彼のシーズン1とシーズン2での演じる役柄が大きく違っていることである。シーズン1では男性的な男性同性愛者として描かれていた事が多く、シーズン2になると一気に女性的な男性同性愛者として扱われることが多くなる。またそれに準じて彼と周囲の女性との関わり方にも大きな変化が起きている。

### ① 男性的から女性的に

シーズン1とシーズン2での最も大きな変化としては、先述のように男性的な男性同性愛者から女性的な男性同性愛者となった事である。

シーズン1では彼に関する表現については男性的なモチーフが多く用いられていた。初登場である第一話でも筋トレをし、肌を多く露出するタンクトップや革のジャケットを身にまとっている。筋トレは第2話でも行っており、これはシーズン1でのみ見られる特徴である。また、女性的な要素としては女性的なしぐさがあるが、これは第一話と第九話にて一度ずつ見られるのみである。

シーズン2になると、彼の行動や彼を取り巻く環境に女性的な要素が散見されるようになる。それは大きく「エフェクト・SE」、「女装」、「女性的な趣味・特技」、「女性化願望」の4つに分けられる。これらはシーズン1ではほぼ見られなかったものである。

まずエフェクトやSEについてであるが、シーズン2初登場のシーンでは、彼

---

<sup>37</sup> 「ドラマ「BOSS」制作発表会見でケンドーコバヤシにゲイ疑惑!? - ライブドアニュース」、ライブドアニュース、<http://news.livedoor.com/article/detail/4110599/> 閲覧日 2014年10月28日。

が犯人を取り押さえている所に対策室への辞令が彼に貼られるのだが、そのシーンではシーズン1では一度も使われなかったピンクのハートが周りに漂うようなエフェクトやファンシーなSEが用いられる。第一話ではイケメンである野立が対策室に入ってきた時に口に手を当て、彼の周りにハートが囲むようなエフェクトが用いられており、そのほかにもツイッターを模したSNSが事件に関連し、同僚である片桐がやっていることを聞くと自分もやりたいという石を見せるのだが、その画面で用いられている色はピンクで、モチーフとしてもハートマークなどが使われている。これ以外にも随所でピンクやハートのモチーフが彼の周囲に漂っていることが度々見受けられる。

つづいて女装については、第2話でBOSSである大澤のような格好をし、第5話でも同様の行為をしている。第八話でも女装をし、それ以外でも第4話で「俺ボスになったらな女装解禁しようか思うとる」と同僚にこぼすシーンがある。

そして女性的な趣味・特技について、最も大きな特徴として彼の趣味にシーズン2では「料理」と「手芸」という属性が追加されている。第九話にて対策室で犯罪被害夫婦の娘が保護され、その面倒を岩井が見る事になるのだが、そこでウサギをモチーフにした弁当を作り、その娘の服のボタンがとれそうなときにそのボタンを直してあげている。裁縫に関しては第七話でもゲスト出演していた韓流スターの衣服を直す表現があり、女性である大澤よりも得意である様子が描かれている。また第五話では料理や家事などの情報を発信しているカリスマ主婦ブロガーが事件に関係するのだが、彼女に会える事に対しても喜びを明らかにしたり、大澤が彼女を知らないことに驚きを示し、彼女の言う事に度々賛同したりしている。

最後に女性化に対する願望であるが、これはシーズン2の各所でその傾向が見られる。第三話では対策室の面々が取材を受けるのだが、そこで彼は「最近じゃ僕が女の子になったらいいのかなあなんて…」と答えており、第五話でも先述のカリスマ主婦ブロガーの出身校について「四葉女子学園高校ですよ、俺も行ったかった一…」と女子校に通いたかったことを明らかにしている。他にも第七話では対策室の面々が警視庁の見学日に自らの知り合いを招くのだが、岩井はそこで若い男性にたいし仮眠室を案内し、その後彼が倒れるというエピソードがあるのだが、その原因は「想像妊娠」となっている。第九話では全段落でも書いたように岩井が被害者夫婦の子供の世話をするのだが、打ち解けて

いくにつれて「母性」に目覚めたという趣旨の発言をし、自らの事を「岩井ママ」と呼び、最終的には実現しないものの「決めた！こうなったら愛海ちゃん（引用者注：被害者夫婦の娘）は俺が引き取る！本物のママなってる！」と発言している。

これらの事から、シーズン1では男性的な部分が多く描かれていたシーズン1から、シーズン2に行くとな女性的な要素が置き換わるかのような形で存在している事がいえる。

## ② 女性との関わり方

続いては、彼と周囲の女性との関わりについて具体例を用いて分析を行っていく。主に岩田が関わる女性として四人の名前が挙げる事が出来る。対策室のボスである大澤絵里子、シーズン1にて科捜研の人間として登場する奈良橋玲子、次にシーズン1全編と2の途中で登場する木元真実、最後にシーズン2から登場する、対策室不在の木元に代わって科学捜査を行う田所幸子の三人である。

シーズン1では木本・大澤と交流することが多いが、女性に対して嫌悪感をあらわにしているシーンが幾つか存在する。大澤に対しては第1話で対策室のメンバーとの顔合わせにおいて大澤が不在の際に「あれがボスねえ、現場もよう知らん女が」とバカにし、第2話では同僚の山村に弱点を探るように依頼する。第7話では大澤がテレビの取材を受けている間に「今日はあの怖い女のおらん良き日じゃのうナハハ」と笑っている。奈良橋については第2話で山村が腹黒であることを口に出すとそれに同意し、木本に関しては、第4話で勤務態度の良くない木元に対し、彼女の仕草を真似してバカにするような態度を見せる。

シーズン2では主に田所・大澤と交流することが多い。田所は周りに恋愛関係の話があると自分に惚れていると勘違いしてしまいやすい性格で、また格好いい男性がいればそちらを見つめるシーンがあり、そういうシーンにおいて、岩田は同じようなポーズで見つめている事が多い。もともとシーズン1から同僚である片桐や野立から誘われたり、二人で話をしようと言われてたり、かっこいいところを見た時に、彼らに惚れたり、逆に自分に好意があるのではないかと勘違いすることはあったものの、シーズン1ではそれを共有する相手がいなかった。

また、大澤との関係性について①で述べたような女性的要素が強調されることによって変化が生じている。シーズン1の最終話では「もしかしたら俺が出会った中で一番の男前はこの人ちやうかなあと思って」といいつつ大沢の写真を出し、大澤の男らしさを肯定的に評価している。

しかしシーズン2では、大澤に足りていない女性らしさについて、岩田が指摘をしたり、手本となるような行動をしたりすることが多くなっている。先述の裁縫をするシーンでも、韓流スターの服のボタンつけを大澤と競い、大澤よりも上手であることが強調されることがある。また大澤が韓流スターにハマるのも、もともとは岩田に誘われたのがきっかけであり、ドラマでは二人で韓流スターと交流しようとする二人の様子が描かれている。

こういったことをまとめると、岩田と周囲の女性との関わり方はシーズン1から2にかけ、ミソジニエ的な蔑視から変化して女性に対して“女性らしさ”を説教したり、また同じ男性を好きになるものとして同じ目線にたって行動したりする同士のような関係性へと変わっている。

ここまで二つの点でシーズン1とシーズン2の岩田の描かれ方の違いについて見てきたが、ここで岩田が男性同性愛者であることを踏まえると製作者側の誤解や偏見を抽出することができる。

まず大きな誤解であり偏見であるのが「女装」と「女性化願望」の2点である。インタビューの記事にもあった通り、今回の役は「ゲイ」であるが、女装や女性化願望というものはトランスベスタイト(クロスドレッサー)・トランスジェンダー・トランスセクシャル・性同一性障害の特徴であり、必ずしもゲイの特徴ではない。メディアで見られる女装をしている同性愛者もいるが、それらはトランスベスタイトといい、異性愛者にも同性愛者にも両性愛者にも存在するものである。とくにシーズン1での男らしさとシーズン2での女性的な様子とが同じ人物であり、間も2年という短い間だったことを踏まえると、ここに製作者側がこれらの違いをわからないままに混同していることが予想できる。

## おわりに

今回の論文では日本の2000年代以降のドラマの分析を行った。そこから見えてきたのは男性同性愛者が女性的な物として描かれ、彼らが異性愛者の男性に恋をする構図の描かれ方がいかに異性愛規範的なものなのか、同性に好意を持つことが逸脱や様々な病気と混同して捉えられていること、男性同性愛者の恋

愛が「叶わないもの」として扱われていることなどであった。

これらの描かれ方は、男性同性愛者の存在がテレビドラマというジャンルにおいて「見える」存在にはなってきたものの、そのイメージ必ずしも肯定的なものではないことを示している。当事者である男性同性愛者にとって自身のセクシャリティーについて否定的な感情を増長させる危険性を持つと同時に、非当事者にとっても偏った見方や情報を得てしまうことになり、両方にとって望ましいものではない。

そのほかにも、テレビでの「オネエ」や「オカマ」のような女性的な男性同性愛者とトランスジェンダーの混同についても可視化に役立つ可能性の一方で、前掲のような当事者、特にトランスの側においてそういった人たちの活動を好ましく思っていないというデータもある。

本論文で絞った対象の外側にも多くの研究対象となりえるものの存在がある。ドラマ以外のジャンルはもちろん、男性同性愛者以外のセクシャル・マイノリティー、年代や時間帯を絞ったがゆえに外れてしまったドラマも数多くある。特に年代については、入手可能性の問題から今回は 2000 年代以降に絞ったが、その結果として日本の男性同性愛者が登場しはじめた 1990 年代初頭のドラマを対象から外すこととなってしまった。それらのドラマの果たす役割というのは決して少なくなく、また描かれ方も概観する限り今回のドラマと大きく異なる。今後の課題として機会があればその点について考えていきたい。

## 参考文献

### 文献資料

岩田準一、「かげま綺談」『犯罪公論』第 3 巻 2 号、1933 年。

氏家幹人、「武士道とエロス」、東京：講談社、1995 年。

風間孝、「ゲイ・スタディーズ」、東京：青土社、1997 年。

風間孝・河口和也、「同性愛と異性愛」、東京：岩波書店、2010 年。

風間孝・飯田貴子、「男同士の結びつきと同性愛タブー」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010 年、93-124 頁。

河口和也、「クイア・スタディーズ」、東京：岩波書店、2003 年

佐藤裕、「差別論-偏見理論批判」、東京：明石書店、2005 年、

CHOISIR 編「やおい論争合本」、自費出版、1994 年。

土田知則・神群悦子・伊藤直哉、「現代文学理論 テキスト・読み・世界」、東京：新曜社、1996 年。

坪内逍遙、「当世書生気質」『日本近代文学大系 3 坪内逍遙集』、東京：角川書店、1974 年（初出

1885年)

J.フィスク・J.ハートレー、「テレビを〈読む〉」、池村六郎訳、東京：未来社、1991年。

J.フィスク、「抵抗の快楽-ポピュラーカルチャーの記号論-」、山本雄二訳京都：世界思想社、1998年。

J.フィスク、「テレビジョンカルチャー」、伊藤守ら訳、千葉：粹出版社、1996年。

藤田真文、「ギフト、再配達-テレビ・テキスト分析入門-」、東京：せりか書房、2006年。

古川誠、「同性愛の比較社会学-レズビアン/ゲイ・スタディーズの展開と男色概念-」、井上俊ら『セクシュアリティの社会学』、東京：岩波書店、1996年、113-130頁。

堀あきこ、「ヤオイはゲイ差別か?」、好井裕明『差別と排除の[いま]⑥-セクシュアリティの多様雨声と排除-』、東京：明石書店、2010年、21-54頁。

前川直哉「男の絆—明治の学生からボーイズ・ラブまで—」東京：筑摩書房、2011年。

溝口彰子、「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン—最近のやおいテキストを分析する」、『クィア・ジャパン Vol. 2』、東京：勁草書房、2000年、193-211頁。

森鷗外「キタ・セクスアリス」『鷗外全集第五巻』東京：岩波書店、1972年（初出1909年）。

森山至貴「ゲイコミュニティの社会学」、東京：勁草書房、2012年。

## 論文資料

古川誠「近代日本の同性愛認識の変遷--男色文化から「変態性欲」への転落まで」、『季刊女子教育もんだい』1997年1月号

古川誠「セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」、『日米女性ジャーナル』1994年号、29-55頁。

## ウェブ資料

池富仁・片田江康男、「LGBT——もはや、知らないでは済まされない——」、ダイヤモンド・オンライン <http://diamond.jp/articles/-/21153> 閲覧日 2014年7月22日

大橋希、「日本初の「ゲイ議員」が誕生」、ニューズウィーク日本版

<http://www.newsweekjapan.jp/newsroom/2011/04/post-218.php> 閲覧日 2013年10月5日

東小雪、「第65回 初の民放バラエティに挑戦! 「私の何がイケないの?」 | 2CHOPO 読みもの」、2CHOPO <http://www.2chopo.com/article/808/> 閲覧日 2014年7月22日

日高庸晴、「REACH ONLINE 2008」 <http://gay-report.jp/2008/index.html>

閲覧日 2013年1月31日

日高庸晴・嶋根卓也、「REACH ONLINE 2011」 <http://gay-report.jp/2011/index.html>

閲覧日 2013年1月31日

「相関図 | クレオパトラな女たち | 日本テレビ」、日本テレビ

<http://www.ntv.co.jp/cleo/chart/index.html>、閲覧日 2014年12月20日。



「電通総研 LGBT 調査 2012」、電通、<http://dii.dentsu.jp/project/other/pdf/120701.pdf>

閲覧日 2014 年 12 月 10 日

「ドラマ「BOSS」制作発表会見でケンドーコバヤシにゲイ疑惑!? - ライブドアニュース」、  
ライブドアニュース、<http://news.livedoor.com/article/detail/4110599/> 閲覧日 2014 年 10  
月 28 日。

「プライムタイム | ビデオリサーチ」、ビデオリサーチ社、  
<http://www.videor.co.jp/about-vr/terms/prime-time.htm>、閲覧日 2014 年 11 月 11 日

「BOSS - フジテレビ」、フジテレビ、[http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/BOSS/](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/BOSS/)

閲覧日 2014 年 11 月 16 日